

【プロローグ】

このマンションに越してきた時のことは、今でもよく覚えている。

インターホンを鳴らして返事を待つ間、私はラッピングされたタオルを持ちながら、もう1度頭の中で挨拶のシミュレーションをした。

えーと、下の階に越してきた三好育子（みよし　いくこ）と申します。宜しくお願いいたします。生まれて初めての一人暮らしと、専門学校に入学してホテル業を目指していたことも相まって、きちんとしなきゃ、と緊張していた。

「太郎！玄関出てー！お母さん今手が離せないのー！」

「はい」

ドアの内側から聞こえてくる親子の会話に、固くなっていた顔が綻ぶ。重たいベージュのドアが開くと、白いTシャツと華奢な肩が目に入った。そこには、タレ目がちな大きな目をした少年が私を見上げていた。

それが彼との始まりになるなんて――

【太郎十五歳】

水彩絵の具のような淡いピンクに、夕暮れ色が塗り重ねられる街の中。どこかでお花見したいなあと思いつながら、通勤路にある街路樹の桜を見るだけで、今年も私の春が終わろうとしていた。

広場のようになっている最寄り駅の駅前では、学ランを着た高校生らしき男の子達が数人集まってはしゃいでいた。真新しい学ラン：新1年生かな？桜が似合う彼らを微笑ましく見ていたら、その内の1人と目が合った。彼は他の友達に手を振ると、私に向かって真っ直ぐ走って来た。

「育子さん、お久しぶりです」

え？社会人になった私に、男子学生の知り合いなんていないけど……。しかも私のことを名前で呼んでる。

「え……あつ、もしかして太郎君？」

「そうです」

「わー、久しぶり！誰かわからなかった！声変わりした？」

「はい、中3の時に。自分でも声の低さに驚きました」

「中3って…そっか、もう高校生になったんだね」

「2週間前に入学式がありました」

「時が経つのは早いねえ。私がマンションに引っ越してきた時は、まだ中学1年生だったのに」

私が住んでるマンションは比較的大きいマンションで、私みたいな一人暮らし用の部屋から、ファミリータイプの広々した部屋まで、一通り充実している。

それにしても、あの太郎君がもう高校生かあ。初めて会った時はまだほったが赤くて幼さが残っていたのに。ご挨拶した時に偶然同じ苗字だということがわかり、以来太郎君は私のことを「三好さん」ではなく、「育子さん」と呼んでくれていた。

「大きくなったね」

「いえ、俺クラスじゃ小さい方なんですよ」

言われてみれば、高校1年生の割には小柄なのかもしれない。でも太郎君とは、マンションのエレベーターやゴミ出しで何度か会う位であんまり顔合わせてないし、いつの間にか目線の高さが同じになっている彼を見ると、やっぱり大きくなったように見える。

少しタレ目な目を細め、顔をくしゃっと崩して笑う姿は、昔実家の近くの人が飼っていたサモエドを思い出させた。太郎君嬉しそう…なにか良いことでもあったのかな。

「育子さん、髪伸びましたね」

「え？あ、うん、そう。学生時代はショートだったんだけど、仕事柄髪をまとめないといけないから伸ばしたの」

「よく似合ってます」

「ありがとう…」

太郎くんってモテそう…。近所のおばさんとしか思ってたんだけど、そんな私のことまでちゃんと覚えてるなんて。高校では、女の子達の注目の的なんだろうなあ。

「そうだ、高校の入学祝いあげなきゃね。何が良い？」

「いえ、そんな…」

「だーいじょうぶ。私も社会人2年目になって少し余裕が出てきたし。遠慮しないで、なんでも言ってみて？」

「なんでも、ですか？」

「そうそう」

高校生なら育ち盛りだもん、やっぱり、お肉かな？商店街のお肉屋さんで、ちょっぴり良いステーキ肉奮発してプレゼントとか…。

俯いて真剣に考え込む様子の彼の顔を、微笑みながら見守る。そうだ、部活で使う物で

も良いかも、なんて思案を巡らせていた。太郎君は、たしか中学ではバスケット部だったはず。唇をきゅつと結び、腹を決めたような表情で顔を上げる彼と目が合った。

「……………が良いです」

「なに？」

「育子さんの……………です」

「えっ、なにに？遠慮しないで良いのよ」

「育子さんのおっぱいを触りたい、です」

「……………へっ？」

仕事中だったら、ホテルの支配人から嚴重注意されるような、間拔けな返答をしてしまった。彼の真剣な眼差しと、そこから放った言葉が、水と油くらい分離している。

きつと耳の誤作動だ。聞き違いとしか考えられない。そう自分の頭に言い聞かせている私に念を押すように、「おっぱい触らせて下さい！お願いします！」と、太郎君は礼儀正しいスポーツマンらしく、ビシッと九十度頭を下げた。

＊

「いい？このことは絶対誰にも言わないこと」

「はいっ！」

「しーっ！声が大きいい。それから、もし誰かの足音がしたらすぐに、私は階段を降りて、太郎君は階段を上がること。良いわね」

「わかったッス」

子どもに言い聞かせるように、何度もルールを確認する。もつとも、今から2人でしようとしていることは、子どものそれではないのだけど。

最寄駅からマンションまでの道中、何度も断り、別の入学祝いを提案したが、太郎君は頑として聞き入れなかった。…まあ、太郎君ももう高校生だもんね。思春期なんて性欲との闘いだろうし…。

「お願いします！」

「どーしても駄目ですか？」

「育子さんが少しでも嫌だと思ったら、すぐに止めますんで！」

何度も何度も懇願され、結局彼が希望する『入学祝い』を聞き入れることにした。

本当に良いのかな……。でもまあ、おっぱいだけなら減るもんじゃないし……。

「しょうがない、少しだけね」と答えた時の、太郎君の無邪気な喜びようったら。あまりにも素直で可愛くて、不覚にもきゅんとしてしまった。

今すぐ触りたいですと興奮する彼と相談し、マンションの階段で『入学祝い』をすることに決めた。

ここは十六階建てのマンション。階段を使う人はほぼいない。白い壁と白い階段。私が住む5階と、太郎君が住む6階の中間にある真っ白な踊り場で、壁に背中を預ける。私の正面に立つ太郎君の視線は、線で結んだようにおっぱいに釘付けだった。

「じゃあ……どうぞ」

「……失礼します」

彼が生唾を飲み込む音が、ここまで聞こえてくるようだった。なぜか私も一緒に唾をごくりと飲み込む。

両手の指をめいっばい広げた太郎君の手が緊張気味に近づいてくる。ドクン、ドクン、と心臓が警告音を鳴らす。

高校生の男の子相手に、やっぱコレはいけないんじゃない？。しかし断る間は既になく、スーツのジャケットを脱いだ私のYシャツの上に彼の両手が重なった。

っ、本当に、触られちゃった…。彼の手のひらは、おっぱいを溶かしそうなほど熱かった。指先から順番に曲げ、乳肉を抱きしめていく。

「っ…」

「うっわ…やわらか……………」

もにゅん、もにゅんと揉まれる感触に、時折息を止める。

「んっ…どう、かな？」

「信じられない位やわらかくて気持ちいいです…」

太郎君の鼻息、荒くなってる…。女である自分にとっては、毎日見る他愛もないモノなのに、彼は躊躇いながらもその手を休めることなく、夢中で揉み続けていた。

「太郎君は、中学で彼女いたの？」

「っ、まさか！！朝から晩までひたすらバスケ漬けの毎日だったんで」

もにゅ、もにゅもにゅ

「んんっ…けど、太郎君モテそうだし、告白されたことはあるでしょう？」

「それは…まあ……………」

「やっぱり！その子と付き合わなかったの？」

彼は俯き、おっぱいに手を当てたまま動きを止めた。

「いや…。好きな人いるんで、全員断ったッス」

好きな子いるんだ…。咄嗟に、セーラー服を着た可愛い女の子と学ラン姿の太郎君が思
い浮かんだ。右手に持っていたスーツの上着をぎゅっと握る。そうだね、太郎君は高校
生なんだから、これから素敵な恋をするよね…。

私は心の底のざわつきを追い払うように、わざと明るい声を出した。

「太郎君の好きな子ってどんな子？私で良かったら相談にのるよ」

「……全く相手にされないんで」

「そんなの頑張ってみないとわからないじゃない！簡単に諦めちゃだめよ！太郎君は優し
いし、それに——」

むぎゅうっ！おっぱいを強く鷲掴みにされた。

「あっ…♡いたっ！太郎君、それ、痛い……」

「すみません…！！！」

我に返ったのか、太郎君は慌てて両手を離れた。彼の指がくい込んだあたりをさすり、
んっ、と息を飲む。

良かった、気づかれてないみたい…。乱暴に掴まれて感じちゃったなんて…。おっぱいの深いところにある性感帯に触れた、みたい…。

「っ、そろそろ終わりにしよっか！太郎君ももううちに帰らないと…」

声を取り繕い、Yシャツのシワを直している両手首を掴まれた。

「育子さんは？彼氏いるんですか？」

えっ、なんで急に私のことを…。

「いないよ。いたら、こんなお願い引き受けないよ」

「じゃあ、今まで他の男に頼まれておっぱい揉ませたことはありませんか？」

「あるわけないでしょ！こんな強烈な体験あったら、忘れたくても忘れられないよ」

「…忘れられないんですか？」

「当たり前でしょ」

「…俺、育子さんのブラジャーが見たいです」

彼は階段の手すりの方を見ながらぼそつと告げた。緊張か興奮か、額に汗が浮かんでいる。

「っ！もうっ！何言ってるのよ！入学祝いはおっぱいを触るだけだって…」

「お願いします！もう触らないんで、何色かだけ、見るだけ…最後に…！お願いします…！」

私は彼の真剣な眼差しにたじろいだ。眉尻が下がっていて、子犬のように見える。目を逸らして俯くと、さつきから気づかないフリをしていた太郎君の制服のパンツが目映った。股間のあたりが、この階段の踊り場に来た時からもうこりと盛り上がっている。パリッとした新品の学ランの上からでも、今にもそこがパンク寸前であることが見てとれた。

「しょうがないな。最後に見るだけよ……」

なんだか太郎君に会った時から、彼のペースに流されっぱなしだ。私は主導権を握られている仕返しと言わんばかりに、彼を焦らすようにYシャツのボタンをゆつくりと1つ1つ外していった。

これ位でいいかな。ボタンを4つ外したところで、周囲から足音が聞こえてこないことを確認し、Yシャツを左右に開いた。

「育子さんのおっぱいとブラジャー……うっ！」

太郎君は我慢の限界が近いらしく、右手で股間を押さえながらも、目だけはおっぱいに夢中になっていた。若い男の子のギリギリの視線が突き刺さる。

ブラジャーからはみ出る谷間には、さつき太郎君に驚掴みにされた証として、赤い痕がうっすらと残っていた。それが直接揉まれたかのようにいやらしく、ブラジャーの中で乳首がムクムクと起き上がっていくのを感じた。

「真っ白なブラジャーなんですネ……」

「……仕事柄毎日スーツだから、下着が透けないようにほとんど白しか持っていないの」

今日身につけているのは、先週買ったばかりの新品だ。一見無地に見える真っ白なブラジャーに、よく見ると小花柄のレースが浮かんでいて可愛い。中心には、ちいさな白いリボンもついている。

「……育子さんって、何カップなんですか？」

「Eカップ、だけど」

「E……巨乳ですネ……谷間もエロい……」

これ以上は、まずい……。太郎君が、じわりじわりと私を壁に追いつめて来ているのがわかる。股間を押さえている右手が今にも私のパンツスーツにぶつかりそうだ。それ以上に、唇と唇が重なりそうで……。もし触れたら、私……。

ガチャッ。かなり下の方でドアが開く音が鳴った。コツ、コツ、コツ、コツ、と階段を上る音が壁に反射している。

丸い目をした彼と目を見合わせ、慌てて距離を取る。お互い話す余裕もないまま太郎君は6階へ、私は5階へ一気に駆け下りた。道中、カタカタと震える手でなんとかYシャツのボタンを留めた。

幸い誰とも顔を合わせることなく自宅に入り、靴を脱ぐなり暗い廊下に座り込んだ。

私、さつき……。Yシャツの上からおっぱいにそっと触れる。両方とも、太郎君に揉まれた感触がたしかに残っていた。

同時に、彼のパンパンに膨らんだ股間を思い出す。太郎君、今日は私のおっぱいを思い出しながらオナニーするのかな。この真上の家で、一晩中……。高校生になったばかりの男の子の、性の対象になるなんて……。

背筋にゾクゾクウツと鳥肌が立った。私はスーツがシワになるのも構わずに、その場で3回もオナニーしてしまった。

＊

あんなに不思議な、そして卑猥な非日常体験をしたのに、翌日からは何事もなかったかのように日常生活が戻った。出勤時間の2時間前に起きて支度し、仕事をこなす。何も変わらない日々。変わったことと言えば、私のオナニーの頻度が増したくらい。

太郎君とは全く会っていない。ううん、正確に言うとなら1回だけ会った。マンションの廊下でお互い1人である時に。

「こんにちは」と、大人ぶった余裕の笑顔で挨拶する私に、太郎君は軽く会釈するだけで、目を合わせないままそそくさと去って行った。部活で忙しいのかな。それとも、私のこと避けてるの…？

【太郎十八歳】

やっぱりここの桜はキレイだなあ。

今年もまた、街路樹を見上げるだけで春が終わろうとしている。後輩指導などの業務量も増えて慌ただしく毎日が過ぎ、気がつけば24歳になっていた。

そういえば、この桜を眺めてた時に太郎君と再会したんだっけ。あれから3年経ったんだ…。もうずっと会ってないけど元気かな。

「育子さん！」

この声…。動揺を悟られないよう、仕事中によくやる『接客モード』の笑顔顔を顔に貼り付けながら、ゆっくりと振り返った。

「太郎君…えっ？」

振り向いた先にいたのは、私よりもずっと背の高い、私服姿の男性だった。

「わあ、おっきくなったね!」

「お久しぶりです。高校で二十cm以上背が伸びました」

華奢だった体格も、身長に見合う筋肉がついている。ただ、タレ目を細めて笑う笑顔は変わっていなかった。

「そっかあ。高校生になってから伸びたんだあ。前は同じ位だったのに。まあ、男の子は、女の子よりも成長期が遅いっていうもんね」

私は『男の子』の『子』を強調しながら言った。

「…育子さん。俺、この春大学生になりました」

その言葉に心臓の音が大きくなっていく。このシチュエーションは、あの時と一緒…。
「だから…」

「太郎君、その続きは言わないで…」

「入学祝いをもらえませんか？」

「……………」

だめ。私と太郎君は6歳も年が離れてるんだから。今回はちゃんと断らなきゃ。ちゃんと…。
と…。

「太郎君、それは…」

「育子さんの部屋、見てみたいです」

「…え？」

「俺、まだ先ですけど、大学卒業したら一人暮らし始めようと思ってて。育子さんの部屋を見て参考にしたいです」

拍子抜けした私はほっと胸をなで下ろした。と同時に心の奥底でがっかりもしていた。

「良いわよ。けど散らかってるから今度の土曜日あたりにでも…」

「今から見たいです！ちらつと見るだけ、お願いします！」

太郎君のピシッと礼儀正しいお辞儀は、身長が伸びた分だけ迫力も増していた。

「しょうがないな。ちよつとだけだよ」

部屋を見せるだけなら大丈夫だよね…。

＊

玄関の外で待たせたらマンション内の誰に見られるかわからない。太郎君には玄関の中で待っていてもらい、1人で1Kの部屋をざっと見回した。朝掃除機はかけたし、下着も干してない。ベッドメイキングも毎朝欠かさないから、花柄のカバーがかかった羽毛布団

も整頓されている。よし、大丈夫。

「おまたせ。どうぞ」

「うわ：めっちゃ可愛い：女子の部屋ですね」

「そんなことないよ。どっちかって言うとしンプルな方じゃないかな？」

それに、女子なんかじゃないよ。太郎君から見ればおばさんだもん…。言葉の続きは声に出しては伝えられなかった。

「1人暮らし用の家電はこんな感じ。あとは大体の8畳の部屋が多いから、家具の配置が大事な」

「へえー」

太郎君は家具の配置というより、化粧水とかの小物類をジロジロと観察していた。

大学の入学祝いと言われて、エッチなお願いをされると想像した私は、彼の背中をぼんやりと眺めていた。太郎君、もうああいうことには興味ないのかな…。もしくは、私以外の別の女の子になら興味はあるのかな…。

3年前のあの日以降、私はマッチングアプリで出会った1人の男性と数回デートをした。でも頭にちらつくのは太郎君の笑顔ばかりで、結局セックスに至らないまま別れてしまった。

「この部屋、育子さんの匂いがする」

「匂いって…ホテルスタッフは香りとか厳しいから、私何もつけてないよ？」

「いえ、香水とかじゃなくて…」

カラダを縮こませ、右手で股間を押さえている。私はそんな彼を見て、パッと顔を逸らした。

「太郎君、そろそろ帰らないとお夕飯の時間でしょ？」

「今日、親2人で旅行行っていないんです」

「そう…。じゃあ外にご飯食べに行こうか？私ごちそうするよ？」

「いえ、それより……」

彼は一度俯き、力強い目をして顔を上げた。

「俺、入学祝いに育子さんの裸が見たいです」

太郎君は頬を染めながらも、真っ直ぐ私を見つめていた。3年前も見た、あの眼差し…。
「裸って…な、なに言ってるの…。冗談言わないで」

「俺、本気です！」

「そんなこと、付き合ってもない女性に言っちゃいけないでしょ？」

「つ、それは、そうですね……けど3年前は、おっぱい触らせてくれたじゃないですか」
ぐっ、と言葉に詰まる。でもここで流されちゃダメ。いつも太郎君のペースにのるわけには……。私は心の中で、『太郎君はまだ十代なんだから』と呪文のように唱えた。

「入学祝いについて言って、この部屋を見せたでしょう？いくつもお願ひするなんて、そんな我儘言っちゃダメ」

「俺、部屋見たいって言いましたけど、『入学祝い』として、なんて一言も言ってませんよ」
「！」

たしかに……。部屋を見たいとは言われたけど、入学祝いとして、とは言ってなかった、かも……。

「だましたのっ？」

「だますなんて……バスケで言うフェイントみたいなもんですよ」

『お願いします』

『育子さんが少しでも嫌だと思ったらすぐ止めますから』

太郎君は前回と同じ台詞を言うと、またあの子犬のような目を見せてきた。カラダはもうすっかり大型犬だというのに。

断らなきや。頭ではわかつているのに、どうしてもその言葉が出てこない。まだ私のカラダに興味もってくれてるんだ…。もしかして私のこと…まさか、そんなわけない。でももし…。

「……わかったわ」

「ほんとですか！ありがとうございます！」

「しーっ！静かに。お隣に聞こえちゃうでしょ？ただし、またいくつかルールを決めるからね」

＊

「おまたせ」

「……いえ」

熱に浮かされたような生返事が返ってくる。バスタオル1枚だけをカラダに巻き、洗面所から部屋に戻った。彼はベッド横で正座をして待機していた。私が太郎君に提示した条

件はこうだった。

1. 大きな声を出さないこと
2. 裸を見るだけで、決して触らないこと

ひとつだけ断られた条件もあった。

間接照明だけにして部屋を暗くすること。

太郎君は明るい部屋で私の裸を隅々まで見たいと言い張って聞かなかった。それがどんなに恥ずかしいことか。セックスの時、明かりを消す派の私にとっては経験したことの無い未知の世界だ。

「じゃあ、入学祝いに…好きなだけ見て良いよ」

彼の前に立ち、バスタオルをはらりと落とした。

「ふ……わ、あ」

自分の頬がどんどん熱を帯びていくのがわかる。普段は衣服で隠れているおっぱいも、乳首も、陰毛も、全て彼の前に晒されている。とても正面から彼の顔を見るなんて出来ない。私は黙って床に敷かれているホワイトラグを見つめた。

「きれいです…すげー…綺麗………」

「感想なんて言わなくて良いから…」

「育子さんの、Eカップのおっぱい…」

「……………」

私は恥ずかしさに耐えきれなくなり、片手で口元を覆った。こんな、興奮してる男の子の前で裸で立ってみせるなんて…私、何してるんだろ…。

「乳首、両方とも勃ってる…」

「…こんなコトしてるんだから当たり前でしょ」

今すぐ恥ずかしい部分をみんな手で隠してしまいたい。でもそれはルール違反だ。私は濡れ始めている内にもキュツと力を入れた。

「育子さん、ベッドに座って…」

言われた通り、ベッドの縁に腰掛ける。どうしていつも太郎君の言いなりになっちゃうんだろ…。

「育子さんのワキの匂い嗅ぎたいです」

「それは…っ」

「触らないから、匂いだけ…お願いします！」

「もう……しょうがないわね」

私は右を向いて顔を逸らし、左肘をそつと天井に向けた。太郎君は『待て』が出来ない犬のように、ワキまでがつついてきた。

「すーっ……ボディースープの匂いに混じって、育子さんの汗の匂いがして……たまんねえ」

「やだっ、汗なんて言わないで……そんなの恥ずかしい……」

「いや、最高です」

唇がワキに触れるか触れないかの距離で、すんすんと吸われる。鼻息がワキをくすぐった。

ワキの匂いを嗅ぎたがるなんて……。お互い指1本触れていないというのに、この部屋の雰囲気は、セックスをするよりよっぽど妖しく官能的だった。

視線を合わせないように気をつけながら彼の上半身を盗み見る。中高バスケット部だった彼は、外見は細身だけど脱ぐと筋肉の輪郭がしっかりとあった。視線を少しずつ下へと下げていく。

「……太郎君、おちんちんツライの？」

「えっ？」

それ、と私が指差したのはチノパンで隠れた太郎君の股間。右手でぎゅーっと握りしめ

ている。射精しないよう必死でこらえてるみたいだ。

「…もう限界です」

私は手で隠している口角が上がらないよう、唇にキュッと力を入れた。私の裸を見て、こんなに興奮してくれてるんだ。

「かわいそう……いいよ、出しても」

「へっ!?!」

「ベッドサイドにティッシュあるから、それ使って」

私が言い終わるより先に、太郎君はチノパンとパンツを一気に脱ぎ、ティッシュを5、6枚抜き取っていた。亀頭をティッシュで包み、右手で激しく陰茎をこすっている。彼は飢えた獣のような目つきで私のおっぱいを凝視していた。

「うっ、んう…っ!」

彼と目が合う。太郎君は顔を赤くし、切なそうに目を細めながらもシコシコと陰茎をしごき続けた。

「ハアッ、育子さん…!育子さん…っ!」

「やだっ、私の名前呼びながらオナニーなんて…!そんなえっちなコトしないで…!」

「育子さん…っ!うううッッ!」

ドピュッ♡ドピュドピュ——ッッ♡

太郎君のカラダが硬直する。半分虚ろな目をして、縋るように私を見上げていた。ジュークジュークと膺が潤い、蠕動を繰り返す。

まだ射精が止まらないのか、太郎君はティッシュを強くペニスに押し当てていた。

「…ねえ、太郎君」

「……何ですか」

背中を丸めて顔を隠す彼は、耳まで真っ赤になっていた。よっぱと深い絶頂だったのか、肩が大きく上下している。

「私のことを考えながら何回オナニーしたことあるの？」

太郎君の肩が、ピクッと揺れる。私の名前を呼びながらオナニーする姿が、あまりに手慣れている感じがしたのだ。

「……毎日です」

「え…」

「初めて会った時から、中学ん時も、ずっと育子さんの裸を想像しながらヌキまくってました」

「そんな…太郎君には同級生とか、憧れのアイドルだっているでしょう？」

「俺には、育子さんだけです」

心臓がひととき大きく跳ね上がった。ずるいよ、太郎君……。そんなこと言われたら嬉し
いに決まってる。意を決したような表情を見せる太郎君の瞳が、私の殻を破ろうとする。

「育子さんのことが忘れられなくて、でも15歳じゃ相手にされなと思ったから……。育子
さんに釣り合う男になれるようになって、3年間ずっと会わずに勉強とか部活に必死になっ
てました」

誰かにこんなに真っ直ぐ見つめられたのはいつぶりだろう。嘘や見栄にまみれた社会人
になってからは一度もなかった気がする。

「高校の入学祝いの後も、育子さんのおっぱいの感触と……白いブラジャーを思い出しなが
ら射精して……」

「……………」

「妄想の中で、数え切れないくらい育子さんとセックスしました」

妄想の私は、彼にどんなコトをされてたんだろう……。

「……それで？ どうだった？ 本物の私は……。妄想が膨らみすぎて、本物のカラダ見てがっかり
してない？」

私は自嘲気味に笑った。

「そんなわけなんですっ！むしろ、おっぱいも乳首も、綺麗な肌も、ワキの匂いも、全部期待以上で、やばいです…」

私は自分の中の空気を入れ替えるように、大きく深呼吸をした。

真に受けちゃダメ。どんなに嬉しいことを言われたって、思春期によくある一時の感情かもしれない。それに私だって太郎君のことは、弟みたいに可愛いだけ。昔から知ってるから、世話をやきたくなるだけ……。

相手はまだ十代。

それを忘れちゃ、ダメ。

「育子さん、おっぱい触りたいです…」

「ふふ、素直でかわいい。でもダメよ。入学祝いは『見るだけ』って約束だもの。その代わり、私のおっぱいを目の前で見て十秒射精我慢出来たら、私のところになるってる女性の部分、太郎君に見せてあげる」

私はびたりと閉じた太ももに手を忍ばせ、愛液を掬い取って彼に見せた。

「っ！わかりました…。育子さんの巨乳を間近で見ても、射精我慢します…」

太郎君のペースにのせられるのもドキドキするけど、太郎君に言うことを聞かせるのも同じだけ興奮する。きっと私たちはそういう関係なのだ。

「じゃあ、私のおっぱいに顔を近づけて、でも触れちゃダメよ…そう、イイ子ね」

ベッドに座ったままの私の前に、彼が立ち膝で寄る。私のおっぱいに顔を寄せる太郎君の『待て』の時間が始まった――

【プロローグ】（ハートなしバージョン）

このマンションに越してきた時のことは、今でもよく覚えている。

インターホンを鳴らして返事を待つ間、私はラッピングされたタオルを持ちながら、もう1度頭の中で挨拶のシミュレーションをした。

えーと、下の階に越してきた三好育子（みよし　いくこ）と申します。宜しくお願いいたします。生まれて初めての一人暮らしと、専門学校に入学してホテル業を目指していたことも相まって、きちんとしなきゃ、と緊張していた。

「太郎！玄関出てー！お母さん今手が離せないのー！」

「はい」

ドアの内側から聞こえてくる親子の会話に、固くなっていた顔が綻ぶ。重たいベージュのドアが開くと、白いTシャツと華奢な肩が目に入った。そこには、タレ目がちな大きな目をした少年が私を見上げていた。

それが彼との始まりになるなんて――

【太郎十五歳】

水彩絵の具のような淡いピンクに、夕暮れ色が塗り重ねられる街の中。どこかでお花見したいなあと思いつながら、通勤路にある街路樹の桜を見るだけで、今年も私の春が終わろうとしていた。

広場のようになっている最寄り駅の駅前では、学ランを着た高校生らしき男の子達が数人集まってはしゃいでいた。真新しい学ラン：新1年生かな？桜が似合う彼らを微笑ましく見ていたら、その内の1人と目が合った。彼は他の友達に手を振ると、私に向かって真っ直ぐ走って来た。

「育子さん、お久しぶりです」

え？社会人になった私に、男子学生の知り合いなんていないけど……。しかも私のことを名前と呼んでる。

「え……あつ、もしかして太郎君？」

「そうです」

「わー、久しぶり！誰かわからなかった！声変わりした？」

「はい、中3の時に。自分でも声の低さに驚きました」

「中3って…そっか、もう高校生になったんだね」

「2週間前に入学式がありました」

「時が経つのは早いねえ。私がマンションに引っ越してきた時は、まだ中学1年生だったのに」

私が住んでるマンションは比較的大きいマンションで、私みたいな一人暮らし用の部屋から、ファミリータイプの広々した部屋まで、一通り充実している。

それにしても、あの太郎君がもう高校生かあ。初めて会った時はまだほったが赤くて幼さが残っていたのに。ご挨拶した時に偶然同じ苗字だということがわかり、以来太郎君は私のことを「三好さん」ではなく、「育子さん」と呼んでくれていた。

「大きくなったね」

「いえ、俺クラスじゃ小さい方なんですよ」

言われてみれば、高校1年生の割には小柄なのかもしれない。でも太郎君とは、マンションのエレベーターやゴミ出しで何度か会う位であんまり顔合わせてないし、いつの間にか目線の高さが同じになっている彼を見ると、やっぱり大きくなったように見える。

少しタレ目な目を細め、顔をくしゃっと崩して笑う姿は、昔実家の近くの人が飼っていたサモエドを思い出させた。太郎君嬉しそう…なにか良いことでもあったのかな。

「育子さん、髪伸びましたね」

「え？あ、うん、そう。学生時代はショートだったんだけど、仕事柄髪をまとめないといけないから伸ばしたの」

「よく似合ってます」

「ありがとう…」

太郎くんってモテそう…。近所のおばさんとしか思ってたんだけど、なさそうな私のことまでちゃんと覚えてるなんて。高校では、女の子達の注目の的なんだろうなあ。

「そうだ、高校の入学祝いあげなきゃね。何が良い？」

「いえ、そんな…」

「だーいじょうぶ。私も社会人2年目になって少し余裕が出てきたし。遠慮しないで、なんでも言ってみて？」

「なんでも、ですか？」

「そうそう」

高校生なら育ち盛りだもん、やっぱり、お肉かな？商店街のお肉屋さんで、ちょっぴり良いステーキ肉奮発してプレゼントとか…。

俯いて真剣に考え込む様子の彼の顔を、微笑みながら見守る。そうだ、部活で使う物で

も良いかも、なんて思案を巡らせていた。太郎君は、たしか中学ではバスケット部だったはず。唇をきゅつと結び、腹を決めたような表情で顔を上げる彼と目が合った。

「……………が良いです」

「なに？」

「育子さんの……………です」

「えっ、なにに？遠慮しないで良いのよ」

「育子さんのおっぱいを触りたい、です」

「……………へっ？」

仕事中だったら、ホテルの支配人から嚴重注意されるような、間拔けな返答をしてしまった。彼の真剣な眼差しと、そこから放った言葉が、水と油くらい分離している。

きつと耳の誤作動だ。聞き違いとしか考えられない。そう自分の頭に言い聞かせている私に念を押すように、「おっぱい触らせて下さい！お願いします！」と、太郎君は礼儀正しいスポーツマンらしく、ビシッと九十度頭を下げた。

＊

「いい？このことは絶対誰にも言わないこと」

「はいっ！」

「しーっ！声が大きいい。それから、もし誰かの足音がしたらすぐに、私は階段を降りて、太郎君は階段を上がること。良いわね」

「わかったッス」

子どもに言い聞かせるように、何度もルールを確認する。もつとも、今から2人でしようとしていることは、子どものそれではないのだけど。

最寄駅からマンションまでの道中、何度も断り、別の入学祝いを提案したが、太郎君は頑として聞き入れなかった。…まあ、太郎君ももう高校生だもんね。思春期なんて性欲との闘いだらうし…。

「お願いします！」

「どーしても駄目ですか？」

「育子さんが少しでも嫌だと思ったら、すぐに止めますんで！」

何度も何度も懇願され、結局彼が希望する『入学祝い』を聞き入れることにした。

本当に良いのかな……。でもまあ、おっぱいだけなら減るもんじゃないし……。

「しょうがない、少しだけね」と答えた時の、太郎君の無邪気な喜びようったら。あまりにも素直で可愛くて、不覚にもきゅんとしてしまった。

今すぐ触りたいですと興奮する彼と相談し、マンションの階段で『入学祝い』をすることに決めた。

ここは十六階建てのマンション。階段を使う人はほぼいない。白い壁と白い階段。私が住む5階と、太郎君が住む6階の中間にある真っ白な踊り場で、壁に背中を預ける。私の正面に立つ太郎君の視線は、線で結んだようにおっぱいに釘付けだった。

「じゃあ……どうぞ」

「……失礼します」

彼が生唾を飲み込む音が、ここまで聞こえてくるようだった。なぜか私も一緒に唾をごくりと飲み込む。

両手の指をめいっばい広げた太郎君の手が緊張気味に近づいてくる。ドクン、ドクン、と心臓が警告音を鳴らす。

高校生の男の子相手に、やっぱコレはいけないんじゃない……。しかし断る間は既になく、スーツのジャケットを脱いだ私のYシャツの上に彼の両手が重なった。

っ、本当に、触られちゃった……。彼の手のひらは、おっぱいを溶かしそうなほど熱かった。指先から順番に曲げ、乳肉を抱きしめていく。

「っ……」

「うっわ……やわらか……」

もにゅん、もにゅんと揉まれる感触に、時折息を止める。

「んっ……どう、かな？」

「信じられない位やわらかくて気持ちいいです……」

太郎君の鼻息、荒くなってる……。女である自分にとっては、毎日見る他愛もないモノなのに、彼は躊躇いながらもその手を休めることなく、夢中で揉み続けていた。

「太郎君は、中学で彼女いたの？」

「っ、まさか！！朝から晩までひたすらバスケ漬けの毎日だったんで」

もにゅ、もにゅもにゅ

「んんっ……けど、太郎君モテそうだし、告白されたことはあるでしょう？」

「それは……まあ……」

「やっぱり！その子と付き合わなかったの？」

彼は俯き、おっぱいに手を当てたまま動きを止めた。

「いや……。好きな人いるんで、全員断ったッス」

好きな子いるんだ……。咄嗟に、セーラー服を着た可愛い女の子と学ラン姿の太郎君が思
い浮かんだ。右手に持っていたスーツの上着をぎゅっと握る。そうだよ、太郎君は高校
生なんだから、これから素敵な恋をするよね……。

私は心の底のざわつきを追い払うように、わざと明るい声を出した。

「太郎君の好きな子ってどんな子？私で良かったら相談にのるよ」

「……全く相手にされないんで」

「そんなの頑張ってみないとわからないじゃない！簡単に諦めちゃだめよ！太郎君は優し
いし、それに——」

むぎゅうっ！おっぱいを強く鷲掴みにされた。

「あっ……いたっ！太郎君、それ、痛い……」

「すみません……！！」

我に返ったのか、太郎君は慌てて両手を離れた。彼の指がくい込んだあたりをさすり、
んっ、と息を飲む。

良かった、気づかれてないみたい…。乱暴に掴まれて感じちゃったなんて…。おっぱいの深いところにある性感帯に触れた、みたい…。

「っ、そろそろ終わりにしよっか！太郎君ももううちに帰らないと…」

声を取り繕い、Ｙシャツのシワを直している両手首を掴まれた。

「育子さんは？彼氏いるんですか？」

えっ、なんで急に私のことを…。

「いないよ。いたら、こんなお願い引き受けないよ」

「じゃあ、今まで他の男に頼まれておっぱい揉ませたことはありませんか？」

「あるわけないでしょ！こんな強烈な体験あったら、忘れたくても忘れられないよ」

「…忘れられないんですか？」

「当たり前でしょ」

「…俺、育子さんのブラジャーが見たいです」

彼は階段の手すりの方を見ながらぼそつと告げた。緊張か興奮か、額に汗が浮かんでいる。

「っ！もうっ！何言ってるのよ！入学祝いはおっぱいを触るだけだって…」

「お願いします！もう触らないんで、何色かだけ、見るだけ…最後に…！お願いします…！」

私は彼の真剣な眼差しにたじろいだ。眉尻が下がっていて、子犬のように見える。目を逸らして俯くと、さつきから気づかないフリをしていた太郎君の制服のパンツが目映った。股間のあたりが、この階段の踊り場に来た時からもうこりと盛り上がっている。パリッとした新品の学ランの上からでも、今にもそこがパンク寸前であることが見てとれた。

「しょうがないな。最後に見るだけよ……」

なんだか太郎君に会った時から、彼のペースに流されっぱなしだ。私は主導権を握られている仕返しと言わんばかりに、彼を焦らすようにYシャツのボタンをゆつくりと1つ1つ外していった。

これ位でいいかな。ボタンを4つ外したところで、周囲から足音が聞こえてこないことを確認し、Yシャツを左右に開いた。

「育子さんのおっぱいとブラジャー……うっ！」

太郎君は我慢の限界が近いらしく、右手で股間を押さえながらも、目だけはおっぱいに夢中になっていた。若い男の子のガラガラ視線が突き刺さる。

ブラジャーからはみ出る谷間には、さつき太郎君に驚掴みにされた証として、赤い痕がうっすらと残っていた。それが直接揉まれたかのようにいやらしく、ブラジャーの中で乳首がムクムクと起き上がっていくのを感じた。

「真っ白なブラジャーなんですネ……」

「……仕事柄毎日スーツだから、下着が透けないようにほとんど白しか持っていないの」

今日身につけているのは、先週買ったばかりの新品だ。一見無地に見える真っ白なブラジャーに、よく見ると小花柄のレースが浮かんでいて可愛い。中心には、ちいさな白いリボンもついている。

「……育子さんって、何カップなんですか？」

「Eカップ、だけど」

「E……巨乳ですネ……谷間もエロい……」

これ以上は、まずい……。太郎君が、じわりじわりと私を壁に追いつめて来ているのがわかる。股間を押さえている右手が今にも私のパンツスーツにぶつかりそうだ。それ以上に、唇と唇が重なりそうで……。もし触れたら、私……。

ガチャッ。かなり下の方でドアが開く音が鳴った。コツ、コツ、コツ、コツ、と階段を上る音が壁に反射している。

丸い目をした彼と目を見合わせ、慌てて距離を取る。お互い話す余裕もないまま太郎君は6階へ、私は5階へ一気に駆け下りた。道中、カタカタと震える手でなんとかYシャツのボタンを留めた。

幸い誰とも顔を合わせることなく自宅に入り、靴を脱ぐなり暗い廊下に座り込んだ。

私、さつき……。Yシャツの上からおっぱいにそっと触れる。両方とも、太郎君に揉まれた感触がたしかに残っていた。

同時に、彼のパンパンに膨らんだ股間を思い出す。太郎君、今日は私のおっぱいを思い出しながらオナニーするのかな。この真上の家で、一晩中……。高校生になったばかりの男の子の、性の対象になるなんて……。

背筋にゾクゾクウツと鳥肌が立った。私はスーツがシワになるのも構わずに、その場で3回もオナニーしてしまった。

＊

あんなに不思議な、そして卑猥な非日常体験をしたのに、翌日からは何事もなかったかのように日常生活が戻った。出勤時間の2時間前に起きて支度し、仕事をこなす。何も変わらない日々。変わったことと言えば、私のオナニーの頻度が増したくらい。

太郎君とは全く会っていない。ううん、正確に言うと1回だけ会った。マンションの廊下でお互い1人である時に。

「こんにちは」と、大人ぶった余裕の笑顔で挨拶する私に、太郎君は軽く会釈するだけで、目を合わせないままそそくさと去って行った。部活で忙しいのかな。それとも、私のこと避けてるの…？

【太郎十八歳】

やっぱりここの桜はキレイだなあ。

今年もまた、街路樹を見上げるだけで春が終わろうとしている。後輩指導などの業務量も増えて慌ただしく毎日が過ぎ、気がつけば24歳になっていた。

そういえば、この桜を眺めてた時に太郎君と再会したんだっけ。あれから3年経ったんだ…。もうずっと会ってないけど元気かな。

「育子さん！」

この声…。動揺を悟られないよう、仕事中によくやる『接客モード』の笑顔を顔に貼り付けたがら、ゆっくりと振り返った。

「太郎君……えっ？」

振り向いた先にいたのは、私よりもずっと背の高い、私服姿の男性だった。

「わあ、おっきくなったね!」

「お久しぶりです。高校で二十cm以上背が伸びました」

華奢だった体格も、身長に見合う筋肉がついている。ただ、タレ目を細めて笑う笑顔は変わっていなかった。

「そっかあ。高校生になってから伸びたんだあ。前は同じ位だったのに。まあ、男の子は、女の子よりも成長期が遅いっていうもんね」

私は『男の子』の『子』を強調しながら言った。

「…育子さん。俺、この春大学生になりました」

その言葉に心臓の音が大きくなっていく。このシチュエーションは、あの時と一緒…。
「だから…」

「太郎君、その続きは言わないで…」

「入学祝いをもらえませんか？」

「……………」

だめ。私と太郎君は6歳も年が離れてるんだから。今回はちゃんと断らなきゃ。ちゃんと…。
と…。

「太郎君、それは…」

「育子さんの部屋、見てみたいです」

「…え？」

「俺、まだ先ですけど、大学卒業したら一人暮らし始めようと思ってて。育子さんの部屋を見て参考にしたいです」

拍子抜けした私はほっと胸をなで下ろした。と同時に心の奥底でがっかりもしていた。

「良いわよ。けど散らかってるから今度の土曜日あたりにでも…」

「今から見たいです！ちらつと見るだけ、お願いします！」

太郎君のピシッと礼儀正しいお辞儀は、身長が伸びた分だけ迫力も増していた。

「しょうがないな。ちよつとだけだよ」

部屋を見せるだけなら大丈夫だよね…。

＊

玄関の外で待たせたらマンション内の誰に見られるかわからない。太郎君には玄関の中で待っていてもらい、1人で1Kの部屋をざっと見回した。朝掃除機はかけたし、下着も干してない。ベッドメイキングも毎朝欠かさないから、花柄のカバーがかかった羽毛布団

も整頓されている。よし、大丈夫。

「おまたせ。どうぞ」

「うわ：めっちゃ可愛い：女子の部屋ですね」

「そんなことないよ。どっちかって言うとしンプルな方じゃないかな？」

それに、女子なんかじゃないよ。太郎君から見ればおばさんだもん…。言葉の続きは声に出しては伝えられなかった。

「1人暮らし用の家電はこんな感じ。あとは大体の8畳の部屋が多いから、家具の配置が大事な」

「へえー」

太郎君は家具の配置というより、化粧水とかの小物類をジロジロと観察していた。

大学の入学祝いと言われて、エッチなお願いをされると想像した私は、彼の背中をぼんやりと眺めていた。太郎君、もうああいうことには興味ないのかな…。もしくは、私以外の別の女の子になら興味はあるのかな…。

3年前のあの日以降、私はマッチングアプリで出会った1人の男性と数回デートをした。でも頭にちらつくのは太郎君の笑顔ばかりで、結局セックスに至らないまま別れてしまった。

「この部屋、育子さんの匂いがする」

「匂いって…ホテルスタッフは香りとか厳しいから、私何もつけてないよ？」

「いえ、香水とかじゃなくて…」

カラダを縮こませ、右手で股間を押さえている。私はそんな彼を見て、パッと顔を逸らした。

「太郎君、そろそろ帰らないとお夕飯の時間でしょ？」

「今日、親2人で旅行行っていないんです」

「そう…。じゃあ外にご飯食べに行こうか？私ごちそうするよ？」

「いえ、それより……」

彼は一度俯き、力強い目をして顔を上げた。

「俺、入学祝いに育子さんの裸が見たいです」

太郎君は頬を染めながらも、真っ直ぐ私を見つめていた。3年前も見た、あの眼差し…。
「裸って…な、なに言ってるの…。冗談言わないで」

「俺、本気です！」

「そんなこと、付き合ってもない女性に言っちゃいけないでしょ？」

「つ、それは、そうですね……けど3年前は、おっぱい触らせてくれたじゃないですか」
ぐっ、と言葉に詰まる。でもここで流されちゃダメ。いつも太郎君のペースにのるわけには……。私は心の中で、『太郎君はまだ十代なんだから』と呪文のように唱えた。

「入学祝いについて言って、この部屋を見せたでしょう？いくつもお願ひするなんて、そんな我儘言っちゃダメ」

「俺、部屋見たいって言いましたけど、『入学祝い』として、なんて一言も言ってませんよ」
「！」

たしかに……。部屋を見たいとは言われたけど、入学祝いとして、とは言ってなかった、かも……。

「だましたのっ？」

「だますなんて……バスケで言うフェイントみたいなもんですよ」

『お願いします』

『育子さんが少しでも嫌だと思ったらすぐ止めますから』

太郎君は前回と同じ台詞を言うと、またあの子犬のような目を見せてきた。カラダはもうすっかり大型犬だというのに。

断らなきや。頭ではわかつているのに、どうしてもその言葉が出てこない。まだ私のカラダに興味もってくれてるんだ…。もしかして私のこと…まさか、そんなわけない。でももし…。

「……わかったわ」

「ほんとですか！ありがとうございます！」

「しーっ！静かに。お隣に聞こえちゃうでしょ？ただし、またいくつかルールを決めるからね」

＊

「おまたせ」

「……いえ」

熱に浮かされたような生返事が返ってくる。バスタオル1枚だけをカラダに巻き、洗面所から部屋に戻った。彼はベッド横で正座をして待機していた。私が太郎君に提示した条

件はこうだった。

1. 大きな声を出さないこと
2. 裸を見るだけで、決して触らないこと

ひとつだけ断られた条件もあった。

間接照明だけにして部屋を暗くすること。

太郎君は明るい部屋で私の裸を隅々まで見たいと言い張って聞かなかった。それがどんなに恥ずかしいことか。セックスの時、明かりを消す派の私にとっては経験したことの無い未知の世界だ。

「じゃあ、入学祝いに…好きなだけ見て良いよ」

彼の前に立ち、バスタオルをはらりと落とした。

「ふ……わ、あ」

自分の頬がどんどん熱を帯びていくのがわかる。普段は衣服で隠れているおっぱいも、乳首も、陰毛も、全て彼の前に晒されている。とても正面から彼の顔を見るなんて出来ない。私は黙って床に敷かれているホワイトラグを見つめた。

「きれいです…すげー…綺麗………」

「感想なんて言わなくて良いから…」

「育子さんの、Eカップのおっぱい…」

「……………」

私は恥ずかしさに耐えきれなくなり、片手で口元を覆った。こんな、興奮してる男の子の前で裸で立ってみせるなんて…私、何してるんだろ…。

「乳首、両方とも勃ってる…」

「…こんなコトしてるんだから当たり前でしょ」

今すぐ恥ずかしい部分をみんな手で隠してしまいたい。でもそれはルール違反だ。私は濡れ始めている内にもキュツと力を入れた。

「育子さん、ベッドに座って…」

言われた通り、ベッドの縁に腰掛ける。どうしていつも太郎君の言いなりになっちゃうんだろう…。

「育子さんのワキの匂い嗅ぎたいです」

「それは…っ」

「触らないから、匂いだけ…お願いします！」

「もう……しょうがないわね」

私は右を向いて顔を逸らし、左肘をそつと天井に向けた。太郎君は『待て』が出来ない犬のように、ワキまでがつついてきた。

「すーっ……ボディースープの匂いに混じって、育子さんの汗の匂いがして……たまんねえ」

「やだっ、汗なんて言わないで……そんなの恥ずかしい……」

「いや、最高です」

唇がワキに触れるか触れないかの距離で、すんすんと吸われる。鼻息がワキをくすぐった。

ワキの匂いを嗅ぎたがるなんて……。お互い指1本触れていないというのに、この部屋の雰囲気は、セックスをするよりよっぽど妖しく官能的だった。

視線を合わせないように気をつけながら彼の上半身を盗み見る。中高バスケット部だった彼は、外見は細身だけど脱ぐと筋肉の輪郭がしっかりとあった。視線を少しずつ下へと下げていく。

「……太郎君、おちんちんツライの？」

「えっ？」

それ、と私が指差したのはチノパンで隠れた太郎君の股間。右手でぎゅーっと握りしめ

ている。射精しないよう必死でこらえてるみたいだ。

「…もう限界です」

私は手で隠している口角が上がらないよう、唇にキュッと力を入れた。私の裸を見て、こんなに興奮してくれてるんだ。

「かわいそう…いいよ、出しても」

「へっ!?!」

「ベッドサイドにティッシュあるから、それ使って」

私が言い終わるより先に、太郎君はチノパンとパンツを一気に脱ぎ、ティッシュを5、6枚抜き取っていた。亀頭をティッシュで包み、右手で激しく陰茎をこすっている。彼は飢えた獣のような目つきで私のおっぱいを凝視していた。

「うっ、んう…っ!」

彼と目が合う。太郎君は顔を赤くし、切なそうに目を細めながらもシコシコと陰茎をしごき続けた。

「ハアッ、育子さん…!育子さん…っ!」

「やだっ、私の名前呼びながらオナニーなんて…!そんなえっちなコトしないで…!」
「育子さん…っ!うううッッ!」

ドピュッ、ドピュドピュ——ッッ

太郎君のカラダが硬直する。半分虚ろな目をして、縋るように私を見上げていた。ジュクジュクと膣が潤い、蠕動を繰り返す。

まだ射精が止まらないのか、太郎君はティッシュを強くペニスに押し当てていた。

「…ねえ、太郎君」

「……何ですか」

背中を丸めて顔を隠す彼は、耳まで真っ赤になっていた。よっぱと深い絶頂だったのか、肩が大きく上下している。

「私のことを考えながら何回オナニーしたことあるの？」

太郎君の肩が、ピクッと揺れる。私の名前を呼びながらオナニーする姿が、あまりに手慣れている感じがしたのだ。

「……毎日です」

「え…」

「初めて会った時から、中学ん時も、ずっと育子さんの裸を想像しながらヌキまくってました」

「そんな…太郎君には同級生とか、憧れのアイドルだっているでしょう？」

「俺には、育子さんだけです」

心臓がひととき大きく跳ね上がった。ずるいよ、太郎君……。そんなこと言われたら嬉し
いに決まってる。意を決したような表情を見せる太郎君の瞳が、私の殻を破ろうとする。

「育子さんのことが忘れられなくて、でも15歳じゃ相手にされなと思ったから……。育子
さんに釣り合う男になれるようになって、3年間ずっと会わずに勉強とか部活に必死になっ
てました」

誰かにこんなに真っ直ぐ見つめられたのはいつぶりだろう。嘘や見栄にまみれた社会人
になってからは一度もなかった気がする。

「高校の入学祝いの後も、育子さんのおっぱいの感触と……。白いブラジャーを思い出しなが
ら射精して……」

「……………」

「妄想の中で、数え切れないくらい育子さんとセックスしました」

妄想の私は、彼にどんなコトをされてたんだろう……。

「……それで？ どうだった？ 本物の私は……。妄想が膨らみすぎて、本物のカラダ見てがっかり
してない？」

私は自嘲気味に笑った。

「そんなわけなんですっ！むしろ、おっぱいも乳首も、綺麗な肌も、ワキの匂いも、全部期待以上で、やばいです…」

私は自分の中の空気を入れ替えるように、大きく深呼吸をした。

真に受けちゃダメ。どんなに嬉しいことを言われたって、思春期によくある一時の感情かもしれない。それに私だって太郎君のことは、弟みたいに可愛いだけ。昔から知ってるから、世話をやきたくなるだけ……。

相手はまだ十代。

それを忘れちゃ、ダメ。

「育子さん、おっぱい触りたいです…」

「ふふ、素直でかわいい。でもダメよ。入学祝いは『見るだけ』って約束だもの。その代わり、私のおっぱいを目の前で見て十秒射精我慢出来たら、私のところになるってる女性の部分、太郎君に見せてあげる」

私はびたりと閉じた太ももに手を忍ばせ、愛液を掬い取って彼に見せた。

「っ！わかりました…。育子さんの巨乳を間近で見ても、射精我慢します…」

太郎君のペースにのせられるのもドキドキするけど、太郎君に言うことを聞かせるのも同じだけ興奮する。きっと私たちはそういう関係なのだ。

「じゃあ、私のおっぱいに顔を近づけて、でも触れちゃダメよ…そう、イイ子ね」

ベッドに座ったままの私の前に、彼が立ち膝で寄る。私のおっぱいに顔を寄せる太郎君の『待て』の時間が始まった――